

移民送出団体「日本力行会」の戦前・戦後

Takayanagi, Toshio / 高柳, 俊男

(出版者 / Publisher)

Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University / 法政大学比較経済研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー / 比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

114

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

2003-04-21

「植民地主義の再検討」プロジェクト研究会

移民送出団体「日本力行会」の戦前・戦後

2002.12.19

高柳 俊男

(1) はじめに

日本力行会（リッウカイ）という、百年以上の歴史をもつ団体がある。キリスト教精神に基づき、海外への移民送出に重点を置いて活動が続けてきた。一般的には知名度が低いかもしれないが、戦前・戦後を通じて、時代に即応した動きをしてきている。その動向をたどることは、この「『植民地主義の再検討』プロジェクト研究会」のテーマとも大いに関連すると言えよう。

そこでここでは、日本力行会の沿革を追いながら、その活動の特徴や問題点などを検討してみたい。

本論に入る前に、まず私と移民研究、とくにこの日本力行会との個人的関係から述べてみる。

私の専攻は在日朝鮮人史だが、在日朝鮮人もその形成過程において、一種の「出稼ぎ移民」的側面を有している。私は「入移民」としての在日朝鮮人史を研究しつつも、「出移民」として日本から「外地」（植民地）に渡っていった人々の歴史も、同時に視野に収める必要性を痛感している。言い換えると、近代日本が植民地国家として君臨していく過程で生じた両方向の人の移動を、そしてその2つのベクトルの関連性をきちんと押さえることが、近代日本の構造を立体的に把握することにつながるのではないかと考えている。

大学院時代は立教大学の文学研究科史学専攻に籍を置いていたが、そのときの実質的な指導教授が、在日朝鮮人史のみならず満州移民に関する研究（たとえば資料集『近代民衆の記録6 満州移民』、新人物往来社、1978年、を編集）もある山田昭次先生であり、また書類上の指導教授は、台湾から留学生として来てそのまま日本で研究を続けた故・戴国輝先生だった（実は戴国輝さんは力行会の理事を務めた時期もあることを、今回この作業をするなかで知った）。移民や植民地を肌で感じる環境の中で研究できたことは、私にとって幸いだった。

また、力行会の所在地（練馬区小竹町2-43-12）は、私の住居のすぐ近くでもある。力行会では1997年、創立百周年を記念して『日本力行会百年の航跡』と、同会が所蔵する「海外発展関係」資料の目録を刊行したが、それらを購入したり、それをもとに力行会を訪ねたりして研究に着手している。

力行会関係資料は膨大にあり、まだ十分な調査研究には至っていないが、中間報告の形で素描してみたい。

（２）日本力行会の創立

日本力行会は 1897 年、牧師の島貫兵太夫（1867－1913 年）によって創設された。彼に関しては、相沢源七『島貫兵太夫伝—日本力行会の創立者』に詳しい。現在の宮城県岩沼市の出身で、仙台神学校、現在の東北学院大学で学んだ。

明治後期から大正期にかけて、救世軍運動が日本の青年たちに大きな影響を与えたが、島貫も例外ではなく、救世軍活動の一環として 1892 年、朝鮮の貧民調査に携わり、仁川や京城で朝鮮の下層階級の人々の暮らしぶりを実地に見聞している。その体験が主な動機となって、現在の千代田区富士見に創設したのが、日本力行会の前身である。当時の名称は「東京労働会」で、のちに「東京精勤会」「東京造土会」を経て、1900 年に「日本力行会」と改称、同時に場所も小石川に移転した。

当初から掲げた団体創設の理念が、「キリスト教による日本民族の霊肉救済」である。霊肉救済とは、貧しき人々を精神的・肉体的に救うことだが、前者はキリスト教の信仰を意味し、後者はとくに苦学生に手を差し伸べる活動を行った。なかでもアメリカに渡ることを奨励し、アメリカで働きながら勉強するための移民教育や、移民の送出業務などを実施した。この点が日本力行会の特徴的な傾向である。組織上も、苦学生の就労先の世話などをする「苦学部」と、アメリカ渡航の情報や手続きを担当する「渡米部」を設置していた。

当初は北米を渡航先としていたが、日本人移民への排斥が高まり、1908 年に「日米紳士協定」が結ばれることで、北米移民熱は下火になっていく。その中で、今度は次第に渡航先として南米方面に注目が集まっていく。

いずれにしても、会の創設当初から、国家としての貧困からの脱却や個人としての刻苦精励を、海外移住と関連づけて考えていたことが特徴と言えよう。

（３）２代会長＝永田稔の就任

日本力行会の活動を大きく発展させ、会の名前を広く知らしめたのが、初代会長島貫兵太夫亡き後の 1914 年、第 2 代会長に就任した永田稔（シグシ、1881－1973 年）である。永田は牧師ではなく、神学を専門に修めた経歴もなかったが、就任に際しては島貫の遺命が有力に作用した。

永田稔は長野県諏訪郡の出身で、1901 年に東京専門学校（現、早稲田大学）に入学、在学中に日露戦争に従軍した。その後、北海道やアメリカで、農業や移民問題の調査研究などを行っている。

永田は会長に就任した 1914 年から 1973 年まで、実に 60 年近くにわたって日本力行会を動かしてきた。とくに「海外発展運動」や「移民送出」の側面に重点を置いて、やや停滞気味だった会を積極的に再建発展させていった。

彼の活動をまとめてみると、行政への移民教育機関設立や、移民保護策策定の働きかけ、

出身地である長野県での移民巡回講演、海外渡航に関する多数の書籍やパンフレットの出版など、移民に関する教育や世論の喚起を精力的に推進したことがわかる。

また満州移民が国策とされた時代においては、関東軍の囑託などとして、満州移民政策の立案や、鉄道自警村建設にも積極的に関与している。

永田は移民推進のイデオログであると同時に、北米・南米や満州にしばしば足を運んで実地見聞を記録した、一種のフィールドワーカー的側面も有していると言えようか。

前述の『日本力行会百年の航跡』に出ている永田の履歴と著作を、参考までに末尾に入れておく。

なお現在の日本力行会の敷地には、初代と第2代会長の銅像が建てられている。

（４）日本力行会のブラジル移民

では、永田第2代会長時代に日本力行会が行った諸活動を、分野別に順次みていく。

まず、最大のものとしてブラジル移民の推進がある。これは、時期的には 1920 年頃からで、文部省と陸軍参謀本部の囑託を受け、在外子弟の教育調査等の目的で南北両米に出張したことが契機になっている。

帰国後、永田はその見聞を単行本にまとめるとともに、南米移民に本格的に関与していく。たとえば 1922 年には、出身地の長野県での「信濃海外協会」設立に奔走し、それをもとに翌年には他県の海外協会と連携して、全国組織としての「海外協会中央会」の組織化を主導する。

また 1924 年に信濃海外協会集団移住地をブラジルのサンパウロ州アリアンサに作る事業を推進し、実際に用地の候補地選定（5500 町歩）や買収も自ら行なった。翌年、力行会からもアリアンサに入植者を送出する。敷地内には、「力行農園」や「南米農業練習所」なども併設された。アリアンサ移住地は力行会にとって、ブラジル移民の拠点的存在となった。

またアルゼンチンをはじめとするブラジルの周辺国への渡航者も多数あった。

（５）日本力行会海外学校のこと

上記のようなブラジル移民の推進と合わせて、海外渡航に向けた事前の移民教育も、より積極的に実行された。

1923 年、従来の「修養部」（試験の結果、海外渡航が時期尚早と判断された者への研修教育機関）を、「日本力行会海外学校」と改称して設立、各種学校としての認可を受けた。1925 年には、海外移住者（男性）の配偶者を養成する「日本力行会婦人修養所」も開設したが、これはのちの満州移民でいうと、いわゆる「大陸の花嫁」の養成に相当しよう。

1926 年には、力行会本部とともに小石川から、より広大な敷地をもつ上板橋村（現、練馬区小竹町）に移転して、本格的な校舎を建てている。

海外学校でどのような教育が行われていたかを見ると、移住者や現地民族をどう指導す

るか、在外子弟をどう教育するか、あるいは海外事業に従事する人材をどう養成するかが主眼だった。したがって、実際の授業の科目としては、「礼拝」や「聖書研究」のほか、現地の言語であるポルトガル語やスペイン語、移住に関する「渡航法」「各国移民法」「植民史」「植民政策」といった講義が置かれていた。

次に見るように、日本社会に満州への関心が高まると、海外学校の中に「満州科」を新設し、1935年には「力行高等海外学校」へと改称される。しかし、満州移民が国策とされ、そのための施設が官営で運営されるに及んで、このような民間機関には次第に入学生が集まらなくなり、1941年ついに皆無となる。1944年に、近隣の茂呂町に設けた大東亜修練所に改組吸収されて廃校となった。

（6）日本力行会の満州移民

さて、ブラジルとならぶもう一つの移民送出先が、日本勢力の浸透とともに、日本民族が「海外雄飛」すべき「大陸の新天地」と目された満州である。

その準備段階として、まず満州に近い朝鮮北部に移民を送っている。1930年、朝鮮北部の咸鏡北道慶興郡に「朝鮮拓殖練習所」（400町歩）を開設して、大陸入植の足がかりとした。

そのうえで満州には1934年、満州国の首都された新京特別市郊外に「満州力行農園」（15町歩）を創設した。そこでは温室でのメロンや花卉栽培、白色レグホン種の養鶏などを試みた。麦・大豆・トウモロコシといった穀物や豆類ではなく、商品作物に挑戦したことが注目される。しかし、現地の気候風土とは一致せずに経営が十分成り立たず、1938年をもって閉園した。

一方同年、新京駅から約12キロ離れた所に、別に「新京力行村」を創設した。ここは土地が100町歩余りで、開村時の入植戸数は24戸、初代の村長は永田稔が務めている。この時期には官主導の満州移民がスタートしていたせいも、入村者の募集は順調には進まず、開村が1年遅延した。敷地内には入植家族の子供たちのために、新京力行村小学校（現、長春市拉拉屯小学校）もつくられた。力行会は本来はキリスト教だが、教会の建設予定地は時節柄、神社に変更されたという。

ここの農業は、先ほどの力行農園とは違って、大豆・小豆・大根などの蔬菜が中心で、それに養鶏や養豚を加味した農業を行っていた。しかし日本の敗戦による閉村時には、わずか10戸にまで減少していた。

官主導の満州移民の場合でも、過酷な自然環境や農法の違いに耐えられず、日本に帰ってきてしまう例が少なくなかった。時期が下ると、新規の移民募集は虫食い状態になった開拓団の補充としての意味合いが強かったし、そもそも「大陸の花嫁」という事業も、そうした若者を現地に定着させる必要から推進されたわけである。

そうしてみると、日本力行会の満州移民も、現地に日本人の自作農を定着させるという理想からは相当隔たっていたものと考えられる。

北米・南米・満州などを合わせた戦前の日本力行会からの移民送出数は、総計で1万人を越えるとされている。

(7) 永田稔の移民観・世界観

では2代会長永田稔は、どのような移民観や世界観のもとにこのように多数の移民を送り出していたのであろうか。

満州移民が推進された日本国内の背景には言うまでもなく、米や繭を中心とした日本の農村が、世界恐慌で受けた打撃をどう建て直していくかという課題があった。「農村更生叢書」の1冊として出された『農村人口問題と移植民』の中で、永田は農村更生の根本的方法を以下のように述べている。

1つは「開拓主義」、すなわち耕地面積を拡張することで、そのために内地のみならず海外移住が不可欠である。

2つ目は「世界的建国主義」、すなわち日本が世界諸民族の中心となり、新しい建国をせよという主張である。

また、同書の他の箇所でも、「将来、世界の人類を指導し、今日よりよりよき世界の建設をなすべき民族としては、我が日本民族が、その第一の候補者であると信ずる」と述べ、日本民族の建国的使命として1つは東洋永遠の平和への道程としての満州の建国であり、もう1つは世界平和への道程としての南米中心地帯における日本民族中心の建国である、と記している。

これらをみても、2代会長永田稔の海外移民奨励策は、初代会長島貫兵太夫にあったキリスト教信仰による貧民救済という人道的側面は薄れ、自民族中心的で膨張主義的な色彩が濃厚だったことが確認される。

(8) 戦後の方向転換と現在の力行会―断絶と接合

さて、戦前において以上のような事業を展開してきた日本力行会は、敗戦により海外の植民地を喪失し、膨張主義的な移民事業が不可能になるという新たな状況の下で、どのように活動を展開していったのだろうか。

戦後の新規の事業として、創立50周年記念事業の一環として行われた「力行幼稚園」(園長＝永田稔)の開設がある。実は力行会は、前述の海外学校以外に一時、商業学校や工業学校を置いた時期があるが、それらは戦後に労働組合の紛争などによってなくなってしまふ。その校舎等を利用して始められたのが幼稚園の事業で、1947年に東京都から認可を受けた。練馬区内でも長い歴史を有する幼稚園の1つとされている。

また永田は1948年以降、農村青少年の生活改善運動である4Hクラブ(head, hand, heart, health)の普及や宣伝に力を注いでもいる。

移民送出事業の面では、たしかに満州への移民は1945年で全面的に途絶えるが、南米方面への移民は1950年代に入って、国の政策として再開された。それに伴い力行会でも、

1954年に「力行南米開拓講習所」を設立し、また1960年には移住者の花嫁の修養幹旋機関として「南十字会」を作り、移民送出活動を再開させている。その中には、すでに移住して安定した生活基盤を築いた人からの「家族呼び寄せ」の形で渡航した人も少なくない。戦後において力行会から送りだされた移民は、総数約1200人と記録されている。

しかしまもなく1960年以降の経済の高度成長により、生活苦を背景として海外に移民する人は日本全体として急速に減少し、むしろ現地から日本へ永住帰国する逆流の動きさえみられるようになった。力行会としても、かつて会から移民した人々と連携を保つ活動（主要な移住地には今でも力行会支部がある）はその後にも維持されるが、本来の移民送出のための活動は1960年代を境にして使命を終了した。

移民送出事業という会のもっとも中心的な柱を失って、力行会は何を活動の中心に据えていくのか。模索の末に見いだされたのが、「国際貢献事業」という新しい道だったように思える。日本の国際化が声高に叫ばれるなかで、それは新たな活路として恰好の存在であった。

具体的には、外国人留学生に宿舍を提供したり、日本語学校を開設（現在閉校）したりする事業である。このうち前者は、もともと1962年に移住者の子孫である日系二・三世を受け入れる「力行国際学寮」としてスタートするが、創立80周年記念事業の一環として1980年に老朽化した建物を一新した際、「力行会館」と改名された。アジアを中心とした世界各国の留学生のみならず、多くの外国人と日常生活のなかで接したいと望む日本人学生にも開放されている。

この力行会館と力行幼稚園の運営が、現在の日本力行会にとっての2大事業と言えよう。戦前海外に多くの人を送り出した人脈や、歴代の留学生のネットワークも使いつつ、新しい時代における国際交流の拠点にしていこうという姿勢が窺える。練馬区の小・中・高校で、授業の一環として国際交流を学ぶ場合に、力行会館に暮らす留学生が出席する例を近年しばしば見かける。敷地内で毎年秋に行われる「力行祭」では、幼稚園の保護者が出す屋台のほか、ブラジル・韓国・中国・タイ・インドネシア・マレーシアなど、力行会館で生活している各国留学生が、それぞれお国自慢の料理を出品するのが恒例となっている。

現在の組織は、1933年段階で財団法人となった「日本力行会」に加えて、もう1つの財団法人「日本力行海外協会」（1956年認可）があり、宗教法人「日本力行基督教会」（1954年認可）と合わせて、3法人体制で運営されている。4番目の法人として、力行幼稚園を学校法人化する案も検討されているようだが、財力の問題もあり実現をみていない。

（9）おわりに―まとめと今後の課題

日本力行会は、キリスト教団体であるが、それ以上に移民送出あるいは移民教育機関として機能してきた。それはとくに、2代会長の永田稔の時代に顕著だった。

移民の送出先は、初めは北米、次に南米、そして満州と、時代の流れに即してシフトさせてきた。

このような日本力行会やその会長が、日本の海外移民や満州移民の展開の中で果たしてきた役割は無視できないものがある。永田の地元である長野県の歴史教育者協議会がまとめた『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』の中でも、北米や南米への移民送出活動を続けてきた永田が、長野県の満州移民事業に果たした役割の大きさに注目している。

私としては、戦前の移民教育および移民送出事業と、戦後とくに高度経済成長後の国際交流や国際貢献事業との連続性と不連続性が、日本の歴史を象徴しているようで興味深い。

大学においても近年「国際化」が叫ばれ、今後の活路を「国際化」や「アジアとの交流」に求めるところも増えている。とくに拓殖大学をはじめ、戦前においてアジアと特殊な関係にあった大学において、自分たちが戦前からアジアを重視し、友好的な関係を維持してきた「先駆者」であるとして、戦前と現在を結び付ける傾向がなきにしもあらずである。

はたして大学に所属する教職員は、自らの大学が戦前において、アジアや植民地の人々とどのような関係を保ってきたかについて、どこまで事実を解明しているのだろうか？戦前への批判的考察を欠いたままで戦後に繋がり、それが現在では時流の「国際交流」や「国際貢献」へと無媒介に流れ込んではいないだろうか？

この課題は、戦前に「大陸部」を開設（1939年）し、大川周明を部長に戴いていたわが法政大学にとっても他人事ではありえない。日本力行会の戦前・戦後の活動を追う研究のもう1つの隠れた意義は、あるいはそこにあるのかもしれない。

最後に、

- ・ともすれば研究者や問題関心の点で乖離しがちな、北米・南米への移民と満州など日本の勢力圏への植民とをつなげて考える視点の獲得
 - ・拓務省の国策移民とは別に行われた、力行会移民をはじめとする満州への自由集団移民の一層の解明
 - ・永田稠研究や日本力行会研究の進展
 - ・日本力行会が所蔵する移民関係資料の確認と今後の積極的活用
- などを課題として記しておきたい。

<参考文献>

- ・日本力行会創立百周年記念誌編纂専門委員会『日本力行会百年の航跡』（日本力行会、1997年）
- ・永田稠編『力行会七十年物語』（1966年）
- ・『日本力行会要覧』各年版
- ・『（財）日本力行会発刊・所蔵「海外発展関係書籍および資料目録集（1）」』（1997年）
- ・相沢源七『島貫兵太夫伝—日本力行会の創立者』（教文館、1986年）
- ・島貫兵太夫原著／相沢源七改稿『力行会とは何ぞや』（仙台宝文堂、1980年）
- ・永田稠『日本植民読本』（宝文館、1928年）
- ・永田稠『＜農村更生叢書＞農村人口問題と移植民』（日本評論社、1933年）

- ・永田稔『満州移民夜前物語』（日本力行会、1942 年）
- ・移民研究会編『日本の移民研究－動向と目録』（日外アソシエーツ、1994 年）
- ・長野県歴史教育者協議会編『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』（大月書店、2000 年）
- ・『法政大学八十年史』（1961 年）
- ・白井厚編『大学とアジア太平洋戦争』（日本経済評論社、1996 年）

永田会長の履歴

明治一四年 長野県にて誕生
明治三四年 長野県立諏訪中学校卒業。東京専門学校（今の早稲田大学政治科）入学

明治三五年 一年志願兵として歩兵第二五聯隊に入営
明治三七年 任陸軍歩兵少尉。叙正八位。日露戦争に従軍

明治三八年 賜勲六等旭日章
明治三九年 北海道農事試験場勤務

明治四〇年 日本力行会に入会
明治四一年 移住の目的を以て北米合衆国へ渡航

明治四三年 北米農報社主幹となる
大正元年 神宮クラと結婚

大正二年 島貫前会長の遺命を受け帰国して日本力行会長就任
大正四年 任横浜海外渡航者講習所長

大正五年 長野県を主とし海外移住思想普及のため講演を続く
「新渡航法」を著作出版

大正六年 「海外発展と我々の教育」を著作出版
大正八年 文部省及陸軍参謀本部の嘱託を受け在外子弟の教育調査を行うため南北両米に出張す。南米移民の基礎的調査研究も併行

大正九年 帰国し南米移住運動に着手。海外発展叢書第一巻「家運挽回編（少年立志談）」及同叢書第二巻を著作出版
大正一〇年 「南米一巡」及「南米写真帖」を著作出版。過労のため結核となり三浦三崎地獄養

大正一一年 信濃海外協会を組織して幹事になる。熊本、広島、和歌山県等に海外協会を組織するの尽力し、南米移民の具体化に努む。「海外移住諸義録」及び「海外立志伝」を著作出版。ブラジル開拓小組合なる試験移民を力行会よりブラジルに派遣
大正一二年 海外協会中央会を組織して、理事となり全国的な南米移民運動の指導をなす。日本力行会高等海外学校を創立し校長となる
大正一三年 南北米に出張、ブラジル国サンパウロ州に信濃海外協会のアリアンサ移住地（五千五百町歩）を建設。右移住地内に力行農園（二百五十拾町歩）入手
大正一四年 「南米再巡」を著作出版。アリアンサ移住地入植者第一陣を力行会より派遣。アリアンサ移住地内に南米農業練習所を創設し、独身者単独渡航の道を拓く
大正一五年 アリアンサ第二移住地（五千町歩）、アリアンサ第三移住地（七千五百町歩）の建設に尽力す。事業拡大のため力行会本部及高等海外学校の校舎増築することになり現在の地点（練馬区小竹町）に着工
昭和二年 海外移住組合聯合会嘱託。信濃海外移住組合理事。拓務省設置運動。文部省嘱託として専門学校に殖民科を設置する運動。宇都宮高等農林学校殖民講座講師
昭和三年 御大典に際し移殖民事業功労者として表彰せられ銀盃を下賜せらる。東京高等蚕糸学校講師「日本植民説本」、「海外発展主義の小学校教育」を著作

出版

昭和四年 長野県に信濃拓植練習所を設置し高等海外学校の教育を充実す
昭和五年 北米合衆国に出張。朝鮮羅津に朝鮮拓植練習所を開設す。在外邦人に日本語優良図書を寄附しその教養を高める文化事業を開始す
昭和六年 外務省、拓務省、信濃海外移住組合、海外協会中央会等の依頼をうけ南北両米へ出張す。「在外子弟教育論」著作出版。力行会内に婦人修養所を開設し海外渡航の婦人の教育幹旋す
昭和七年 宮城県小牛田農林学校に植民講習所を開設す。力行会を財団法人とし初代理事会長となる。「南米三巡」を著作出版。満洲視察「満洲に於ける移住地の建設」著作出版
昭和八年 関東軍嘱託なり移住地建設に尽力す。新京に満洲力行農園を設置し開拓青年の教育をなす。「農村人口問題と移殖民」著作出版
昭和九年 拓務大臣より感謝状並びに銀盃を下賜せらる。勲五等瑞宝章「海外移住地の建設」著作出版
昭和一〇年 「アリアンサ移住地十年史——創設十年」出版
昭和一一年 留學生寮を開設し北米の二世及び東亞諸国からの留學生の教育幹旋をなす。稲米二世運動
昭和一二 年 新京近郊に新京力行村を建設し満洲開拓の新機軸を開く。雑誌「力行世界」第四百号記念出版
昭和一四年 南方開拓人材養成目的を以て力行商業学校を創立し校長となる。蒙顯視察。勲五等旭日章。「蒙顯殖殖と対支移民」著作出版
昭和一五年 拓殖功労者として拓務大臣より表彰せらる。在外日本児童作品展覧会を開催す。記念二六〇〇年事業として「ブラジルに於ける日本人発展史」編纂出版に努力す。「在米同胞と語る」著作出版
昭和一六年 南進同志録成勢々頭となる。還暦記念として「国見する者」著作出版
昭和一七年 「満洲移民夜前物語」「南方新建築」「南方新渡航法」著作出版
昭和一八年 海軍省嘱託として南方各地を視察。「南方拓殖第一報」著作出版。力行工業学校校長となる。福島県白河に力行農場を開墾し食糧増産す。印刷部の改革充実を計る。板橋区茂呂町に大東亜修練所を設置す
昭和一九年 「信濃海外発展史」、「あまぞん建國」、「満洲移民後日物語」、「南方新村」脱稿す
昭和二一年 力行幼稚園を設立し園長となる。力行工業学校併置中学校校長となる。「力行五十年史」編纂出版
昭和二四年 「力行五十年史海外編」篇纂出版。「4Hクラブの研究」を著作出版し農村青少年教育を啓蒙す
昭和二五年 社団法人日本4Hクラブを組織しその副会長となり4Hクラブ運動の普及に尽力す。「4Hクラブは生長する」著作出版。「4Hクラブ手帖」「4Hクラブの指導者」「4Hクラブと教育者」「私の会計手帖」著作出版。「四四二隊（北米二世部隊）顯訳出版。司法保護司に任せらる
昭和二六年 在外会員の招待を受け

け戦後の移民方策を立て且二世教育方針確立の目的を以て南北両米を夫人同伴で視察旅行す。ブラジル国サンパウロ市に於て「4Hクラブの大要」を日本語及びポルトガル語にて著作出版
昭和二七年 「南米四巡」著作出版。「信濃海外移住史」「創設二十五周年」（アリアンサ移住地二十五周年史）出版。宗教法人日本力行基督教教会を創設しこれが主幹者となる
昭和二八年 南米呼寄移民運動を起し力行会内に移住学寮を開設し戦後最初の独身者の単身渡航者の教育幹旋をなす。外務省海外移住懇談会委員となる。「ブラジルに於ける日本人発展史」（下巻）を再版。「日本新建築説本」「南米新渡航法」著作出版
昭和三一年 「海外移住諸義録一〇巻」著作出版
昭和三二年 力行会創立六十周年記念事業、南米開拓講習所設立
昭和三五年 南十字会を設立して独身移住者の結婚あつせんに着手、約八〇名の移住花嫁をあつせんした
昭和三六年 南米開拓講習所夜間部を開設。農家訓練生、家事訓練生制度に着手。文部省と海外移住「日本の外苑」著作出版、国際学寮を開設
昭和三七年 移住女性のために女子寮を開設
昭和三八年 南米の日系の子供に本を贈る運動に着手、自衛艦で運搬して頂く。（約三万冊）
昭和三九年 国際学寮に日系人以外の外国人留學生収容に着手「頌壽記念」著作出版
昭和三九年 「移住立案所感」著作出版
昭和四〇年 「海外発展と二世指導」著作出版
昭和四一年 「力行七十年物語」著作出版

力行会関係出版目録

PUBLISHED BOOKS

書 名	著 者	発行年月	書 名	著 者	発行年月
救 世	島 貫 兵 太 夫	明治28／ 3	4Hクラブの研究	永 田 綱	昭和24／12
軍人と基督教	〃	〃 28／ 5	4Hクラブの大要	〃	〃 26／11
成功の秘訣	〃	〃 34／－	4Hクラブは成長する	〃	〃 25／－
現今日本名家列伝	〃	〃 36／－	4Hクラブの指導者	〃	〃 25／－
力行（会機関誌）	〃	〃 36／ 8	4Hクラブと手帳	〃	〃 25／－
渡 米 策	〃	〃 36／ 9	4Hクラブ著作集	〃	〃 25／ 1
渡米新報	〃	〃 40／ 9	442部隊（訳）	〃	〃 25／ 6
新苦学法	〃	〃 44／ 3	4Hクラブの指導者養成講義録集	〃	〃 25／12
力行奮闘録	〃	〃 44／ 6	4Hクラブと教育者	〃	〃 26／ 5
力行会とは何ぞや	〃	〃 44／ 9	信濃海外移住史	〃	〃 27／10
新渡米法	〃	〃 44／12	両米四巡	〃	〃 27／10
力行世界（会機関誌）	力 行 会	大正 4／ 2	南米新移住案内	〃	〃 27／10
農村と移民問題	永 田 綱	不明	海外移住新方策	〃	〃 28／ 1
満州信濃村の建設	〃	〃	日本新建国統本	〃	〃 28／ 7
新渡航法	〃	大正 5／ 7	南米移民について	〃	〃 28／11
海外発展と我国の教育	〃	〃 6／ 4	官営移民と民営移民	〃	〃 29／ 1
家運挽回編・ブラジル	〃	〃 8／ 9	新移民保護法私案	〃	〃 29／ 4
南米一巡	〃	〃 10／ 5	若人の歌	〃	〃 29／ 8
南米日本人写真帖	〃	〃 10／ 6	南米移住講義録	〃	〃 〃
海外移住講義録	永 田 綱 他	〃 12／ 6	移民募集第一線	日本力行海外協会	〃 31／ 8
両米再巡	〃	〃 14／12	高等学校の移民教育私見	永 田 綱	〃 32／ 1
海外立志伝	〃	〃 15／ 6	移住者と創世記	永 田 泉	〃 33／10
家運挽回編	〃	昭和 2／11	海外移住の諸問題	永 田 綱	〃 35／ 3
海外発展主義の小学教育	〃	〃 3／ 5	ブラジル力行会40年史	ブラジル力行会	〃 36／ 6
支部会報	日本力行会	〃 3／ 7	文部省と日本民族海外発展主義の教育	永 田 綱	〃 36／ 9
在外子弟教育論	永 田 綱	〃 7／ 3			
両米三巡	〃	〃 7／ 4	日本の外苑	〃	〃 37／ 1
中等教育と海外移住について	〃	〃 7／12	政治家と海外発展問題	〃	〃 37／ 3
移住と宗教	古 田 純 三	〃 7／－	移住立法案所感	〃	〃 38／ 4
移住地の建設	永 田 綱	〃 9／ 3	頌寿記念	〃	〃 40／ 3
力 行 綱	日本力行会	〃 9／12	海外発展主義の教育と	〃	〃 40／ 9
力行留學生学園	〃	〃 12／－	在外二世対策の提案		
蒙疆墾殖と対支移民	永 田 綱	〃 14／ 4	力行会70年物語	〃	〃 41／11
在米同胞と語る	〃	〃 15／ 9	ブラジルの二世たち	日本力行会	〃 42／－
日本民族小学生作品集	鈴 木 七 郎	〃 15／12	創世紀入門	永 田 泉	〃 43／11
国見するもの	永 田 綱	〃 17／ 2	世界をまたに	永 田 綱	〃 45／ 5
満州移民前夜物語	〃	〃 17／ 5	信州人の海外発展	〃	〃 48／ 2
南方新建国	〃	〃 17／ 8	新 壑	〃	〃 49／ 9
南方新渡航法	〃	〃 17／ 9	やしほじ	永 田 くら	〃 53／ 4
南方拓殖第一報	〃	〃 18／ 8	日本力行会名鑑	ブラジル力行会	〃 57／ 6
日本力行会創立50年史	〃	〃 21／11	永田綱の生涯と思想	永 田 久 林 寿 雄	〃 61／ 4
力行50年史海外編	〃	〃 23／11	島貫兵太夫伝	相 沢 源 七	〃 61／ 4
4Hクラブ理念と方式	〃	〃 24／ 5	日本力行会百年の航跡	記念事業実行委員会	平成 9／ 1